



発行：水資源・環境学会

NEWS LETTER No. 94

2025年12月30日

目 次

2025年度 水資源・環境学会 冬季研究会のご案内

テーマ：末石富太郎教授の提言を中心に

【主催】 水資源・環境学会

【共催】 公益財団法人 千里リサイクルプラザ

【日時】 2026年3月14日(土) 14時～16時30分

【会場】 長岡京市中央生涯学習センター

2025年度 冬季研究会のご案内	1
2025年度 研究大会の報告	4
2026年度 研究大会について（第1報）	7
2026年度 現地研究会 企画募集	7
2025年度 現地研究会開催報告	8
事務局からのお知らせ	18

水資源・環境学会設立前からのメンバーであり、水資源・環境学会に多大なご貢献を頂きました、末石富太郎先生（大阪大学名誉教授・滋賀県立大学名誉教授）が2025年7月15日に逝去されました。

今回の冬季研究会では、末石富太郎教授の水資源・環境学会へのご貢献を広く紹介し、今後の水資源・環境学会の研究活動に問い合わせられたものを探りたいと思います。

末石先生 年譜

1931年2月11日	兵庫県生まれ
1953年3月	旧制京都大学工学部（土木工学科）卒業
1953年4月～1958年3月	大阪市技術吏員水道局工務課
1958年4月～1967年3月	京都大学助教授
1967年4月～1975年9月	京都大学教授
1973年3月～1977年3月	京都大学経済研究所教授を併任
1974年4月～1975年10月	大阪大学教授を併任
1975年10月～1991年3月	大阪大学教授
1991年4月～	大阪大学名誉教授
1991年4月～1995年3月	京都精華大学人文学部教授
1992年3月～2002年3月	千里リサイクルプラザ市民研究所長
1995年4月～2001年3月	滋賀県立大学環境科学部教授
2001年4月～	滋賀県立大学名誉教授
2025年7月15日	逝去（享年94歳）



☆☆ 冬季研究会プログラム ☆☆

開会挨拶

14:00–14:05

仲上 健一 会長（立命館大学・名誉教授）

第Ⅰ部：末石富太郎教授が問い合わせたもの

①14:05–14:25 「『水資源研究の課題と展望』の今日的意味」について

仲上 健一（立命館大学・名誉教授）

末石富太郎『水資源研究の課題と展望』は、水資源・環境学会の前身である水資源・環境研究会での、1983年12月17日に研究報告が、後に、西原春夫・末石富太郎編『現代の水問題の諸相 板橋郁夫還暦記念』、成文堂、1991年に所収されている。本論では、「水資源研究の意義は、地域資源としての「人水一如」を達成するための計画戦略をめざすことをおいて、他にない。」と水資源・環境研究の指針を示したものであり、水資源・環境学会の研究展望を示したものである。

②14:25–14:45 「廃棄物めがね」でみた未来の姿

小幡 範雄（立命館大学・名誉教授）

末石先生は1967年大阪空港の上空から下を見たとき「大変だ、これはみなごみだ」とはかない気分になったとある。50年以上前に廃棄物めがねが発想されている。まだ捨てられていない潜在的な廃棄物に目を向け、そこから社会の仕組みや私たちの価値観を読み解こうとする視点である。私たちは「何がごみになるのか」「なぜ捨てられるのか」といった問い合わせを通じて、経済システムや消費文化、技術発展のあり方を批判的に考察することが可能となる。廃棄物めがねは、廃棄を生まない未来を描くための思考のレンズである。廃棄物めがねを通して将来を考えてみたい。

③14:45–15:05 環境容量を振り返って

三輪 信哉（大阪学院大学・教授）

末石富太郎先生が著された『都市環境の蘇生 破局からの青写真』（1975年）は、今年でちょうど半世紀を迎えることとなる。この著作は、先生が44歳の若さで構想されたものであり、その中で提示されたのが「環境容量理論」であった。今日においても「環境容量」という言葉は広く使われており、主に「自然の浄化能力」や「許容能力」を指すものと解釈されている。ここでは、先生が初めて構想された環境容量理論を振り返り、その今日的な意義について再考したい。

(P3に続く)



第Ⅱ部：末石曼荼羅の片鱗を語る

15:10-16:25

総合司会：秋山 道雄（水資源・環境学会理事、滋賀県立大学名誉教授）

【話題提供】

- ①盛岡 通（大阪大学名誉教授／関西大学名誉教授）
- ②花嶋 溫子（大阪産業大学建築・環境デザイン学部教授）
- ③濱崎 宏則（長崎大学総合生産科学域（環境科学）・環境科学部准教授）
- ④吉岡 泰亮（立命館大学授業担当講師／水資源・環境学会理事）
- ⑤近藤 隆二郎（元滋賀県立大学環境科学部教授）

話題提供のあとは、参加のみなさまと末石富太郎教授の想い出を語りたいと考えます。

閉会挨拶

16:25-16:30

仁連 孝昭 事務局長（長浜バイオ大学・理事長）

※終了後は近隣で懇親会を開催する予定です。

参加のお申し込みについては、2026年1月中旬頃の会場確定にあわせて、Webサイトから受付をする予定です。今しばらくお待ちください。



会場：長岡京市中央生涯学習センター
京都府長岡京市神足2-3-1

アクセス：JR京都線「長岡京駅」西口より
歩道橋で直結

**※会場（部屋番号）については、最終的な確定が2026年1月中旬頃となります。
確定次第、部屋番号についてはWebサイトに掲載しますので、そちらでご確認ください。**



2025年度 研究大会 開催報告

2025年度の研究大会は、6月7日（土）に、法政大学市ヶ谷キャンパスで開催されました。実行委員長の野田理事、セッション座長の大塚理事に、当日の概要をまとめて頂きました。

自由論題報告

大塚 健司

第1報告は河野忠会員（立正大学）による「硯洗いに用いるハス葉面の朝露の水質と硯水との関係」であった（写真1）。旧暦の七夕に朝顔の葉面に付着した朝露で硯を洗った水で習字をすると字が上手くなるという言い伝えに着目して、その時期の朝露の水質になんらかの特徴があるのではないかとして、その時期の朝露と降水の水質を観測した結果を検討した。その結果、その時期の朝露は蒸留水に近い水質であることが明らかになったとする。観測が一地点一回に限られていることから今後より詳細な調査研究計画による検証が待たれるところである。



写真1：河野会員の報告の様子

第2報告は秋山道雄会員（滋賀県立大学名誉教授）による「水環境政策における運営組織の機能—宮城県広瀬川の事例をめぐって」であった（写真2）。環境用水の制度化の端緒となった仙台市の六郷堀・七郷堀の事例に関して、仙台地域水循環協議会の役割について水利権取得後20年を経過した現時点で改めて関係者の聞き取りやその後明らかにされた行政資料をもとに検証した。協議会の設立の背景には都市化による水路の水質や景観の悪化などの環境問題があり、また当初から仙台地域の水循環を再構築するための幅広い課題に取り組んでいた。土地改良区との調整が必要な渴水問題への対応には仙台市と市民の協働を図る別の協議体が重要な役割を果たしたという点は流域ガバナンスの事例としても興味深いものであった。



写真2：秋山会員の報告の様子



写真3：会場の様子

シンポジウム報告

大会実行委員長 野田 岳仁

本大会では「小規模水道の将来像」をテーマに、住民の自主管理によって維持されてきた小規模水道の現状と課題を多角的に検討した。給水人口100人以下の小規模水道は水道法の適用外で、「みえない水インフラ」として扱われてきたが、人口減少や高齢化によって存続の危機に立っている。2024年度には水道行政が国土交通省へ移管され、能登半島地震を契機に分散型水供給の必要性が政策的にも検討されつつある。本シンポジウムは、こうした政策動向をふまえ、縮小社会における水インフラのあり方を再考する機会となった。

牛島健氏（北海道立総合研究機構）の基調講演「人口減少に適応する小規模水供給モデルとしての地域自律管理型水道の可能性」では、北海道の地域自律管理型水道の実態が詳細に報告され、地域運営組織との連携可能性が提起された。

続く、西田継氏（山梨大学）の招待報告「現代日本で水をブリコラージュできるか」では、山梨や奥能登での小規模分散システムの社会実践が紹介され、可搬型の小型造水機の展示も行われた（写真4）。保屋野初子氏（地域水道支援センター・元星槎大学）の招待報告「過疎地区における小規模水供給設備の必要性と可能性」では、能登の復旧困難地区の現地調査をふまえ、過疎地域における小規模水供給の必要性が論じられた（写真5）。野田岳仁（法政大学）「小規模水道にみる水の代替不可能性」では、小規模水道が村落自治を支えている実態が示され、村落にとって代替不可能な価値を有することが明らかにされた（写真6）。



写真4：西田氏の報告の様子



写真5：保屋野氏の報告の様子



写真6：野田理事の報告の様子



総合討論では、小規模水道の課題を地域の自治や存続の問題として捉え直す視点が共有された（写真7）。また、上水道適用外の小規模水道だけでなく、水道法適用内の簡易水道が人口減少によって100人を下回りつつある地域が生まれつつあり、法制度上の位置付けが異なる複数の小規模な水道システムについても、それぞれの実態を丁寧に切り分けながら議論を深める必要性が指摘された。学会としても、水道のような水インフラと地域の持続に関わる課題に今後も注視し続けるべき重要課題であることが改めて確認され、有意義なセッションとなった。

最後に伊藤達也理事（法政大学）による閉会挨拶では、公共事業による社会的議論の必要性が改めて述べられた（写真8）。



写真7：総合討論の様子



写真8：伊藤理事による閉会挨拶の様子

2026年度 研究大会について（第1報）

大会実行委員長：三輪信哉（大阪学院大学）

テーマ：大阪湾の開発と環境（仮）

開催日時：2026年6月6日（土）10時00分～17時00分（**対面のみ予定**）

会場：大阪学院大学（大阪府吹田市岸部南2丁目36-1）

アクセス：阪急電車「正雀」西口より徒歩5分

JR京都線「岸辺」南口より徒歩5分

午前中に研究報告、午後に基調講演とテーマ関連報告、総合討論を予定しています。詳細は決まり次第、学会Webサイトに掲載します。

【報告者募集について】

報告を希望される方は、大会実行委員長の三輪までメールでお知らせください。申込期限は2026年3月31日です。

メール：miwan☆ogu.ac.jp（☆→@）

今回は、**午前中の研究報告、および午後の大会テーマに関連した報告の両方を募集します。**

【午前中の研究報告を希望される際は、下記4項目もお知らせください】

- ①報告者の氏名（連名の場合は当日発表者も明記）
- ②連絡先メールアドレス
- ③報告のタイトル
- ④報告の要旨（400文字程度）

2026年度 現地研究会の企画募集について

2026年11月に開催を予定している現地研究会の企画を募集しています。自薦他薦かまいませんので、簡単な内容、日程などを担当の飯岡まで

メール iioka408☆gmail.com（☆→@）で寄せてください。

理事会で検討のうえで、2026年6月頃に発表したいと思います。



2025年度 現地研究会（エクスカーション）開催報告

企画担当理事 飯岡宏之

2025年10月5日の日曜日、水資源・環境学会エクスカーションが京都で開催されました。2020年からの3年間はコロナ禍で中止をしていましたが、2023年より再開しました。「江戸川中流（荒川区）から荒川合流点」（2023）、「多摩川水害の二つの裁判（1974年、2019年）の地域」（2024）と開催し、2025年は「千年の都、京都をつむいだ鴨川を歩く」としました。

水資源・環境学会では、創立40周年を記念としてブックレット「環境問題の現場を歩くシリーズ」を刊行しており、すでに6巻まで発行されています。2024年7月には『京都・鴨川と別子銅山を歩く』（著者：鈴木康久・大滝裕一・高橋卓也）が発刊されており、今回は鴨川を担当された鈴木康久・大滝裕一の両氏に案内して頂きました。参加者は学会、京都の『カッパの会』、鴨川運河会議からあわせて16人となりました。

当日の行程は、三条大橋（14：00） ⇒ 三条小橋 ⇒ 瑞泉寺 ⇒ 車道 ⇒ 三条大橋 ⇒ 川端通（せせらぎの道） ⇒ 出雲の阿国 ⇒ 四条大橋（15：00） ⇒ 鴨川右岸、河原（寛文新堤） ⇒ 五条大橋（16：00） ⇒ 高瀬川（木屋町通） ⇒ 鴨川運河 ⇒ 宮川町（17：00）、懇親会は鈴木さんの紹介で、京都五花街の一つである鴨川左岸の宮川町で行いました。

私のようなものでも、牛若丸と弁慶の話などから、鴨川の名前は知っていますが、その歴史はよく知りません。今回のエクスカーションで、千年の京都は鴨川なしには理解できないことが良く分かりました。また、一見さんお断りの花街での、経験もいい思い出なりました。あらためて、案内していただいた両氏にお礼を申し上げます。

余談ですが、京都市水道局が管理している琵琶湖疏水は、鴨川に流れ込みます。この琵琶湖疏水は、2025年2月に国宝・重要文化財に指定されました。国宝は琵琶湖疏水施設「第一隧道」、重要文化財は琵琶湖疏水施設「大津閘門・堰門」、「大津運河」、「第一隧道」です。2015年に大津から京都市の蹴上までの約8kmに観光船として舟運が復活しています。私は上り、下りとも、乗りましたがとくに桜の季節は圧巻です。事前予約が必要ですが、インターネットから申込めます。



琵琶湖疏水船Webサイト <https://biwakososui.kyoto.travel>

鴨川の三条大橋から五条大橋を歩いて

水資源・環境学会会長 仲上健一

全国的に知名度抜群の京都市内の鴨川を歩く水資源・環境学会の企画は私にとっては長年の夢であった。昭和50（1975）年に、私が京都大学大学院の博士課程（衛生工学研究科）のとき、研究の一環で鴨川の生態系調査で鴨川上流から下流まで歩いた。その成果は、久次富雄、若井郁次郎、仲上健一「魚類生態を指標とした都市河川環境について-鴨川水系を例として-」、日本陸水学会第41回大会、1976年10月、北海道大学（函館）で報告した。実に50年ぶりの鴨川歩きである。

今回の企画は、水資源・環境学会『環境問題の現場を歩く』シリーズ『京都・鴨川と別子銅山を歩く』の著者、鈴木康久理事（京都産業大学現代社会学部教授）に全面的にお願いしました。当日の説明は、鈴木理事のほか、カッパ研究会世話人大滝裕一様（元京都府土木技師）様、琵琶湖疏水研究会・カッパ研究会の安田勝様という、超豪華メンバーによるものでした。ここに感謝の意を表します。

日本最初の駅伝競争は、大正6（1917）年4月27日から3日間にわたり開催された、奠都五十周年記念大博覧会「東海道駅伝徒歩競争」である。その競争区間は、京都・三条大橋～東京・上野不忍池の博覧会正面玄関の508kmを23区間に分けたものであった。この石碑は、そのスタート地点として駅伝の歴史の始まりの地となった三条大橋を示すものである（写真1）。

三条大橋は、1590年に架橋された日本最初の石柱橋である（写真2）。「東海道五十三次」の終点であり、江戸時代には五街道のひとつ東海道五十三次の西の起点となる。そのため幕府直轄の公儀橋に位置付けられた。現在の橋本体は1950年4月に完成した鋼単純H型橋である。橋長は73m、幅員は16.7mである。

写真3は三条大橋から鴨川上流部を望んだ様子である。どんよりとした空であった。



写真1：三条大橋のたもとにある
「駅伝発祥の地」の石碑
(財団法人日本陸上連盟が2002年建立)



写真2：三条大橋のたもとにある
三条大橋の歴史の解説板



写真3：三条大橋から鴨川上流を望む



写真4：高瀬川にかかる「三条小橋」のたもとにある「高瀬川 生洲」の石碑



写真5：三条木屋町にある「瑞泉寺」で紹介されている「秀次公絵縁起」の一場面。三条河原で斬られた豊臣秀次と妻子30人以上を埋めて秀次の首を曝した「悪逆塚」が描かれている。

高瀬川は京と伏見を結ぶ全長約11キロの運河である。角倉了以・素庵親子によって開削され、慶長16年（1611）～19年（1614）に完成した（写真4）。

また角倉了以は高瀬川開削の際、三条河原で斬られた豊臣秀次と妻子30人以上を埋めて秀次の首を曝した「悪逆塚」が荒れ果てていたのを憐れみ、「悪逆」の2文字を削って塚を修復、供養のために瑞泉寺を建てている（写真5）。



写真6：三条大橋のたもとにある弥次郎兵衛と喜多八の像
(1994年に三条小橋商店街振興組合が設置)

東海道五十三次と言えば、『東海道中膝栗毛』を思い浮かべる方もおられるだろう。その主役である弥次郎兵衛と喜多八の像が、1994年に三条小橋商店街振興組合により設置された（写真6）。



写真7：三条大橋の下流側にある「落差工」の様子。

昭和10年（1935）の大水害を契機に実施された大規模な鴨川の改修事業で、治水と景観の両立を目的に「落差工」が整備され、現在も鴨川の象徴的な存在となっている（写真7）。

現在の川端通（三条通から塩小路通あたり）は、かつて琵琶湖疏水（東側・山側）と京阪電車（西側・鴨川側）が存在した。しかし京阪電車が京都の主要道路と平面交差していることによる交通渋滞が問題となり、京阪電車は連続立体交差化事業が行われ、昭和62年（1987）に七条から三条間が地下化された。同時にそれに並行する琵琶湖疏水も大半が暗渠化され、それらの用地を用いて現在の川端通が構築されている。

その際、暗渠化された琵琶湖疏水の水を引き込む形で人工の河川がつくられ、一般公募で「せせらぎの道」という名称がつけられた（写真8、写真9）。



写真8：せせらぎの道を歩く参加者たち。



写真9：鈴木康久先生がフリップを持ち解説する様子



写真10：鴨川左岸を三条から四条へ
移動する参加者たち。



写真11：鴨川の河川敷からみた四条大橋。

三条界隈の見学を終え、四条大橋へ移動した（写真10、13）。四条大橋は平安末期の永治2年（1142）に架けられたが、度々流失して架け直されている。現在の橋は昭和10年（1935）に発生した京都大水害による被害を受けて昭和17年（1942）に完成した橋長65m、幅員25.0mの鋼桁橋（鋼連続桁橋）である。川の中に2つの橋脚を持つ（写真11）。

四条大橋のたもとには、1994年に建立された出雲阿国の像がたつ（写真12）。斜向いにある南座は、元和年間（1615年～1624年）に官許されたという歴史ある劇場である。一帯が、慶長8年（1603年）、出雲の阿国が歌舞伎踊りを初めて踊った歌舞伎のルーツと伝わっている。出雲の阿国は、出雲大社所属の鍛冶方・中村三右衛門の娘で、慶長8年（1603年）、出雲の阿国という名の女性が率いる芸能集団が、京の都で斬新な踊りを演じたのが歌舞伎のルーツだといわれている。



写真12：四条大橋のたもとにある
出雲の阿国の像



写真13：四条大橋から鴨川上流をのぞむ



写真14：安田様による四条大橋の解説の様子。



写真15：現在でも見られる寛文新堤の石垣。

四条大橋の下では、安田勝様に四条大橋の解説をして頂いた（写真14）。

このあたりの鴨川の護岸には、「寛文新堤」と呼ばれる石垣がみられる（写真15）。

工事は寛文9（1669）年に開始され、翌年に終了した。老中の板倉内膳正が施工にあたったため、京都では板倉堤とも称されている。それが建設された場所は、上賀茂から五条までの区間であったが、右岸は今出川より下流部、左岸は二条より下流部では石積（石垣と呼んだ）になっていたものの、それより上流は基本的には土積で、護岸の目的でその前面には蛇籠が設置されていた。賀茂川では右岸だけに堤防工事がなされ、左岸では実施されなかった。

※上記内容は、吉越昭久「京都・鴨川の「寛文新堤」建設に伴う防災効果」、『立命館文学』593号、2006年3月に記載の内容を要約したものである。



写真16：大滝様による五条大橋の解説の様子。



写真17：高瀬川沿いを五条から四条に北上。

五条大橋では、大滝様に五条大橋の解説をして頂いた（写真16）。五条大橋は、古くから、洛中から鴨川東岸への、特に清水寺参詣のための便として架橋されていた。かつては現在の松原橋の位置に架かっていた木橋であった。五条大橋の擬宝珠には「正保2（1645）年」の表記がある。そして五条大橋を後にし、高瀬川沿いを北上し、宮川町に向かった（写真17）。



現地研究会の終了後は、宮川町の「鴨きく」にて懇親会がありました（写真18）。鈴木理事のご手配で、お休みの日曜日にわざわざ開けていただきました。若い女将さんお疲れさまでした。参加の皆様もお疲れさまでした。



写真18：宮川町「鴨きく」での懇親会の様子。

鴨川の現在を見るにつけ、その歴史の深さを感じるとともに、そこに係わってこられた人の息吹を感じた。今回は、水資源・環境学会とともに、カッパ研究会の皆様とご一緒した。鴨川に関するエポックをじっくり見て、深く議論を語ることができたことは望外の幸せであった。鈴木・大滝・安田の3氏に改めて感謝する次第である。

鴨川の三条大橋から五条大橋の魅力を伝える

理事 京都産業大学教授 鈴木康久

「環境問題の現場を歩く」ブックレットシリーズNo. 5として「京都・鴨川と別子銅山」を書かせて頂いたご縁で、鴨川の三条大橋から五条大橋の間を巡検いただく機会を得ることができた（写真1）。お忙しい中を参加頂いた方々に、先ずは感謝を申し上げたい。

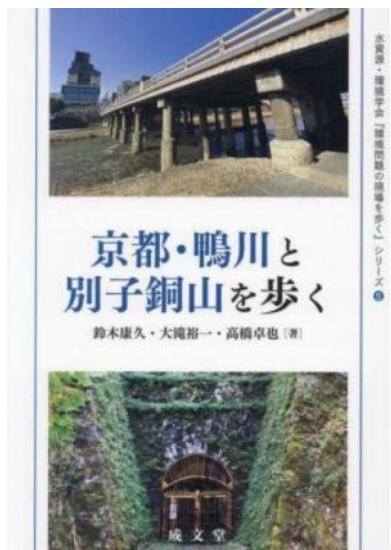


写真1：ブックレット「京都・鴨川と別子銅山を歩く」
(成文堂。1,000円+税)

下記リンクより、主要ネットショッピングの一覧が出ます。
<https://www.google.com/search?q=9784792334420>

京都の中心を流れる鴨川の魅力は、千年の都である平安京を育んできたことにある。鴨川については、令和5（2023）年に学会賞を頂いた『京都の山と川』（中公新書）や、『京都 鴨川探訪』（白川書院）など様々な書籍や論文は、納涼床などの文化を中心に伝えてきたが、今回の現地研修会でのポイントは、橋梁に重点をおいたことにある。

平安時代に架設された五条橋（現在の松原橋）は清水橋とも呼ばれ、清水寺の勧進橋であった。同様に、「一遍上人絵伝」（1299年）に描かれている四条橋は祇園橋とも呼ばれており、祇園社（現在の八坂神社）の勧進橋であった（写真2、写真3）。これら民衆の橋が、豊臣秀吉（1537–98）の都市改造で、五条橋は道路名称もあわせて300mほど南へ移された。四条橋も中洲へ渡る仮橋となり、東海道の西の起点となる三条大橋が新たに架設された。研修会では、これらの三条大橋、四条大橋、五条大橋などの変遷や擬宝珠、高欄、橋脚などの特徴について説明させて頂いた。



写真2、写真3（2点とも）：『一遍上人絵伝』に描かれた鎌倉期の四条橋（祇園橋）
(原本は東京国立博物館所蔵)



現在の三条大橋が「一遍上人絵伝」に描かれている四条橋と形態が同じであり、1000年前の姿を伝えてくれる（写真4）。部材一つを見ても石柱を使用した橋脚、高欄（ヒノキ）や擬宝珠（青銅）の装飾などに、400年前と変わらない意匠を楽しむことができる。青銅の高欄金具や擬宝珠など出来得る限り古い部材を使っているのが有難い。このような橋が都会にあることが奇跡ではないだろうか。



写真4：三条大橋の石柱モニュメントと擬宝珠

四条大橋も100年前には大正ロマンともいえるセセッション式洋風意匠のコンクリートアーチ橋へと変わるなど近代的になる中で（写真5）、昭和40（1965）年の改修においても高欄は流線形を重視したデザインで、素材には青銅を用い、釘隠しと同様の試みとしてボルト隠しには御所車が用いられている。新たな様式の中にも、古都の品格が伝わる工夫がなされている。



写真5：大正2年に架橋された四条大橋（古絵葉書）

五条大橋は明治10（1877）年に西洋風の白いペンキ塗りの高欄となつたが、そのデザインへの皇族や都人からの不満もあり、明治27（1894）年に元の擬宝珠のある高欄に戻され、現在に至っている（写真6）。



写真6：明治27年以降の五条大橋（古絵葉書）

五条大橋の擬宝珠に彫られた文字を読むと、正保2（1645）年から昭和27（1952）年までに起こった洪水などについて知ることができる。それぞれの橋が千年の中で歴史を刻み、他にはない特徴を今に伝えてくれている。これらの事を知ってもらえることで。鴨川の三条大橋から五条大橋の間がゴールデンブリッジ・ゾーンとして世界に誇るエリアとなり、橋を見るために観光客が訪れる。その日を夢見て、会員の皆様の御指導、御協力のもとで出来る事を一つ一つ積み上げていきたい。



事務局からのお知らせ

学会誌原稿募集

水資源・環境学会では学会誌「水資源・環境研究」への投稿を募集しております。

「水資源・環境研究」は、年2回、電子ジャーナルとしてJ-STAGE上で発行しており、会員の皆様に原稿を迅速に公開し、原稿の投稿機会を増やすことを目指しております。また、「論説（論文）」や「研究ノート」の他に、国内外における地域の話題や時事問題等をテーマにした「水環境フォーラム」、書評も受け付けております。

次号（第39巻1号、2026年6月発行予定）の締め切りは、「論説」は2026年1月31日、それ以外は2026年4月30日です。次々号（第39巻2号、2026年12月発行予定）の締切は、「論説」は2026年7月31日、それ以外は2026年10月30日です。

投稿規程や執筆要領は学会公式サイトに掲載しています。投稿希望の方は原稿送付状を投稿原稿に添えて「お問い合わせフォーム」内の「論文等の投稿」よりご送付下さい。

原稿送付状は学会公式サイト内「お問い合わせフォーム」から「論文等の投稿」を選択して頂けると、Word形式のファイルがダウンロードできますので、そちらに記入をお願いします。

学会誌の内容をさらに充実させるべく、皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

水資源・環境学会 事務局長 仁連 孝昭

※非会員学生(元学生)による卒業論文等の内容の積極的な投稿を呼び掛けております。

https://jawre.org/wp-content/uploads/2023/08/journalNonMember_20230731.pdf

(投稿規程)

https://jawre.org/wp-content/uploads/2024/12/JjournalRules_20241201.pdf

(執筆要領)

https://jawre.org/wp-content/uploads/2025/01/JjournalGuidelines_20241201.pdf

(バックナンバー目次と内容)

<https://jawre.org/publication/>

■ 連絡先に変更はございませんか？

所属先の変更・転居等により学会からの郵便物が返送されて来る場合や、登録頂いているE-mailアドレスがエラーで届かない場合が多数あります。

所属先、連絡先等に変更がありましたら、すみやかに学会公式サイト内

「お問い合わせフォーム」の「その他お問い合わせ」より事務局まで連絡をお願いします。

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

法政大学文学部地理学科 伊藤研究室

発行：水資源・環境学会

公式Webサイト：<https://jawre.org/>